

午前中 1 本目の発表「樺太を教える - 植民地か？それとも内地の延長か？」(新谷)は、日本史において朝鮮・台湾と比べると影の薄い樺太に注目して、日本の近現代史を「樺太で教えよう」という教材化の試みである。筆者は、世界史の視点からの感想を述べることにする。神奈川県立歴史博物館では、2019年に特別展「北からの開国—海がまもり、海がつないだ日本—」が開催されており、近年、アメリカ合衆国やイギリス・フランスといった西欧との関係以外の外交史が注目されている印象がある。そこに樺太であるから世界史寄りの筆者としても、興味がかきたてられるものだった。樺太を取り巻く 19~20 世紀の状況を見ると、ロシアを介してヨーロッパの情勢がわかってくる。大陸をめぐる日韓関係ももう少し巨視的に見て行くと日露関係も助けて見えてくるのが興味深い。このように諸外国との関係の中で樺太を捉え直してみることは、非常に有意義だという実感を持った。

午前中 2 本目の発表「大衆化の時代における民族運動—三・一独立運動を事例として考える」(中山)は、三・一独立運動の多様かつ重層的な様相を描き出した点で画期的だといえる。従来の教科書レベルの理解では、運動には民族意識の高い指導者たちがいたことくらいは触れても、それ以上に触れることはない。運動の実態としては、参加者の圧倒的多数は傍観者で、運動全体をまとめるような明確なリーダーはいないということだった。参加者の動機が多岐にわたる。自覚的に参加したもの、周りに合わせて参加したもの、デモ参加の気持ち良さから雰囲気盛りが盛って参加したもの、さらには参加を強制されたものまでいる始末である。また、アメリカ合衆国の反応や新科目の大きな内容的柱である「大衆化」に対して、「大衆化はメディアや大企業、政府など「権力」によってつくられるのでは？」という問いが示され、聴衆も高い関心を示した。教員間のさらなる意見交換に繋がっていくことを期待したい。

午後の講演会は、オンライン形式で横浜ユーラシア文化館の伊藤泉美氏が登壇した。タイトルは「横浜中華街のあゆみ」で、横浜在住の安楽家の 140 年にわたるファミリーヒストリーを、伊藤氏自身による聞き取り調査などフィールドワークに基づく具体的な内容が散りばめられ、濃密な内容であった。氏の調査は『横浜商人録』(明治 14 年発行)や『夜半鐘声』(横浜中華会館発行、明治 5 年)などの史料の裏付けをとりつつ、羅佐臣に始まる一族の営みを彩り豊かに描いている。史料だけでも、図版だけでもなし得ない、長年の研究・取材と一族との信頼関係に裏打ちされたものだからこそ語れる内容である。日本近頃の荒波に飲み込まれそうになりながらも、たくましく時々の難局を乗り越えてこられた安楽(羅)家の人々に拍手を送りたい気持ちになった。コロナ禍で、人間の醜い差別心などが現れやすいご時世である。こんな時こそ、「御近所さん」で助け合う気持ちを持てたらと思う。開国以後の横浜は、いろいろな考え・希望を持って各地から集まってきた人たちみんなの故郷なのだから。

今回の研究発表は関歴研も兼ねており、発表会終了後に巡検が実施された。徒歩で汽船道を辿り、JICA の海外移住資料館に移動、館内は解説付きで 30 分では物足りないほど濃いものだった。その後、万国橋を経由して北仲地区の旧横浜生糸検査所跡を右手に見ながら馬車道に至る。現在は東京藝術大学大学院映像研究科が入っている旧安田銀行横浜支店、神奈川県立歴史博物館となっている旧横浜正金銀行本店は、往時の横浜金融街に思いを馳せるのに十分な重厚さを備えた建物群であった。最後に桜木町駅周辺の鉄道発祥の地記念碑とリニューアルした旧横浜鉄道歴史展示で巡検を締めくくった。普段、このように系統立てて巡る機会を持てていなかっただけに貴重な時間となった。